

---

# 存在価値～神が愛したモノ～

神崎 琉璃華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

存在価値〜神が愛したモノ〜

### 【Nコード】

N4350A

### 【作者名】

神崎 琉璃華

### 【あらすじ】

高校生、保坂光輝。ごく普通の高校生の身におきる不可解な出来事。全ては、世界の創造時代「アダムとイヴ」にかかると謎の少女、桐嶋真由にいわれて・・・光輝を中心におきる運命に迷うものたちの物語。

## 1ピース 眠らない町の上で

「私は・・・私は、生きていく意味がないの?!」

茶髪の髪の毛が肩まで降り、薄い赤い瞳の少女は訴えるかのように言う。

少女の前に立つ、青年とも呼べるような男はクスツと笑みを浮かべて答える。

「君に、生きていく価値などない」

「ふざけるな!!」

2人の会話に口をはさんだのは、少女の後ろに立っていた青年だった。

少女とは同じ年ぐらいの青年は、少女の前になる男をにらみつける。

「・・・」

「・・・何をいうんだい？君がいけないんじゃないか・・・？」

君が、彼女の存在価値を否定しているのじゃないか!!」

「・・・!!・・・俺・・・が・・・？」

「・・・」

青年らしき男の言葉に、少女は黙ったままだった。

少女の側にいた青年は少女のほうに顔をむけ、問う。

「君が創ったのだろう？自分の快樂のために・・・!!」

「どうということなんだ？俺が・・・俺が、君を苦しめてるのか？」

「・・・」

「そっだよ？保坂 光輝君・・・？」

「うそだ・・・嘘だ

!!!!!!!!!!」

《ピリリリリッ》

「・・・ゆ・・・夢・・・？」

青年はさっと目をあける。

瞳に移るのは、見慣れた天井。あれは、夢？

それにしてもリアルな夢だった。それに、

「あの子・・・」

自分を憎むような目つきをした男。

憎しみと怒りに満ちた瞳。

自分の方をみて困った表情をした少女。

今にも、泣き出しそうだった少女。

「・・・」

俺は知っている。

あの男を・・・

あの少女を・・・

青年はかばんをもち、家を出た。

今日は平日。学校の日だ。

「・・・あの子・・・誰なんだろう・・・」

確かに、俺は知っている。

だけど、直接会ったことはないと思う。

それに、名前も知らない。けれど、知っている・・・

「光輝さんっ！」

名前を呼ばれ、保坂ほさか 光輝みつひは振り返った。

光輝より背が小さく、大きなスポーツかばんを肩から下げている少年がいた。

「早太っ」

光輝は少年の名前を呼ぶ。

汐屋しおや 早太そしたは、にこにこしながら光輝の隣を歩いた。

光輝の表情を覗くなり、表情をしかめた。

「・・・光輝さん、何かありましたか？」

「は？・・・なんで？」

「顔、歪んでますよ？」

早太はクスクス笑いながら言う。

「それはヤバイ」といいながら、光輝は夢のことは心の奥底へとしまっことにした。

「それより、放課後の約束・・・覚えてますか？」

早太の問いかけに、一瞬、光輝は止まったもののすぐに答える。

「ああ、サッカー・・・教えるんだよね？」

「“？”はなんですか？・・・忘れてましたね？」

「く」

「誤魔化さないてくださいよ!!！」

早太は頬をふくらませていう。

光輝は口笛を吹きながら、学校への道を走っていく。

ずっと、この日々の繰り返しだと思っていた。

“あの子”との出会いがなければ

ずっと・・・

学校が終わってから、光輝は早太の約束どおり早太のいる中等部へいった。（光輝の光陵学園は、中等部・高等部とつながっている）

「あ、光輝さん！」

「よっ！練習に励んでるか？」

早太はすぐさま光輝の側へと駆け寄る。

光輝は辺りを見回した。変わらない校庭。校舎は隣だが、校庭も一応別々にある。

この校庭をこつしてみるのも、久しぶりだった。

自分が、真っ直ぐな瞳で希望と見つめていたあの頃・・・

いまは、もう儚い夢をだ。

「汐屋君　っ！！」

名前を呼ばれた早太は、顔をあげた。

校舎の2階のベランダから、1人の少女が顔を出していた。

早太と同じ年ぐらいだろうか？茶髪に近い黒髪が肩の側で風に揺らされていた。

「姫優理っ」

秋菜 姫優理は、早太に向かって小さな手を大きく振った。

「これから部活？あのね、午後の授業が家庭科でゼリー作ったの。よかったら食べない？」

みんなの分あるし」

「ああ、食った」

「じゃあ、飲み物と一緒に持っていくね」

そういつて、姫優理は校舎の中へと入っていく。

その会話を、光輝はにやにやししながら見つめていた。

「彼女か？」

「ち、違います！マナージャーです！！決して、彼女とか・・・そういうのじゃないです！！！」

「やるじゃん？部長さん？」

「光輝さんっ！！」

早太は顔を赤めらせて言う。

「とにかく、練習をみてくれ」

平常心を取り戻した早太は、ふと光輝の方を見る。

しかし、先ほどまでそこにいたはずの光輝の姿はない。

「汐屋君」

姫優理は手にいっぱいのジュースと綺麗なピンク色の紙袋をもって  
いた。

早太は顔をしかめる。

「汐屋君？」

「に・・・逃げられた

！！！！」

「バーカ。だーれがサッカーなんか教えるかよ」

光輝は校門を出て、校庭のほうにむかっていう。

「俺は、嘘はいつてないからね」

確かに、光輝は嘘はついていない。

光輝は、早太に“練習にいつてやるよ”と前日に約束した。

光輝は“練習”にはいつた。しかし、光輝は“教える”という約束  
はしてない。

「騙される早太がいけねんだからな」  
皮肉っぽく光輝は言い放つ。

時計の短針は、6をさし、長針は12を少し過ぎたところだった。

光輝は町をブラブラとし、家であるマンションの前に立っていた。

光輝は2人暮らしだ。妹の華南と暮らしている。しかし、華南は先月全寮制の学校へいったために

いまは、光輝の1人暮らし。

部屋へ戻って、夕食を作って、片付けて・・・勉強も一通り終わる頃には、

すでにテレビの時計は11:00を過ぎていた。

この時間、光輝はいつも眠れない。

夜型のためだろうか、12:00を過ぎないと眠れない体質である

光輝は、この時間になると

決まってマンションの屋上へといく。

屋上から見る景色は、都会ながらなかなかのものだ。

階段をのぼり、光輝は屋上のドアノブに手をかけたとき、

《ガタンツツ》

ドアの向こうから、何かの音がした。

先客がいるのか・・・と思いつつ、光輝は迷うことなくドアを開けた。

《ガチャツツ》

ドアを開けた瞬間、風が光輝の方へはいりこんでくる。マンションは20階のため、屋上はなかなかと涼しい。(冬は寒い)

光輝の視界に入るのは、変わることはない景色。

夜中をまわろうとしているにもかかわらず、町には光が絶えない。

「・・・眠らない町・・・」

光輝はそつと、口に出して呟く。

光が消えることなく、夜でも明るく賑やか。人は眠っても、この町は眠らない。

「・・・だれ・・・?」

光輝ははつとした。

目の先にある柵に、1人の少女がいた。光輝も少女も、お互いのことを気づいていなかったようだ、

光輝が呟いた言葉に反応したのだろう。

光輝から暗いためか、はつきりと顔は見えない。きつと、マンションに住む子供だろうと光輝は思う。

「・・・あ、ごめん」

すまなそつに光輝は謝った。

「・・・別に・・・」

そついうと、少女は光輝の方へ歩み寄る。

さつと、光輝はドアから体を避けた。

少女が自分の横を通ったとき、光輝は目を疑う。

少女が行った後も、後姿を光輝はじつと眺めた。

「どついうことなんだ?俺が・・・俺が、君を苦しめて  
るのか?」

夢の中で、知らないはずの少女にいった言葉。  
知っているようで知らない少女。

心に引つかかっていた言葉と少女の存在。

“あれ”は、夢なんだ。

そう、自分に言い聞かせた。

だからこそ、信じられなかった。

頭の中が真っ白になる。そして、真っ白になった頭に文字が浮かび上がる。

まるで、遙か昔から知っていた言葉のように。

「…………ま…………ゆ…………」

光輝は、小さな…………しかし、はっきりとした口調で言う。

ドアノブに手をかけようとした少女の手は止まり、光輝の方を振り返った。

間違えない。

「・・・桐島・・・真由・・・？」

夢で出会った、少女だ。

## 2ピース 暁の空に眠る意志

名前を呼んだあと、光輝はとっさに口に手を当てた。似ているだけなのに、何名前を呼んでいるのだろう・・・自己嫌悪。

少女の方はというと、光輝の顔をじっと見つめていた。

「・・・なんで、名前・・・知ってるの？」  
当たってたんだ・・・と不思議に光輝は思った。なぜ、知っていたのだろうか？

しかし、相手はすごい気を悪くしているようだ。

光輝はやバイな・・・と思いつつ、頭の中で必死と言いつきを考えた。いた。

しかし、少女は光輝に言い訳を考える隙も与えないぐらい早い口調でしゃべりだす。

「なんで、あたしの名前を知っているの？あたし、君に会ったことないよ？」

あたし、君とどこかで会った？てか、なんで名前呼ぶの？喧嘩売ってる？」

「ち・・・違う！！喧嘩売ってないし、君と会ったことない！！」  
とりあえず、光輝は言う。

すると、ますます少女は顔を歪ませた。

「じゃあ、なんであたしの名前を知っているの？おかしいでしょ？  
会ったこともない人の名前を知ってるなんて・・・」

少女は光輝の顔から、少し下へと視線をさげた。

光輝の胸に光る校章。それが、少女の目を丸くした。

「光陵高等学園・・・？もしかして・・・」

少女はじっと、光輝の顔を見つめる。

「・・・な・・・なに？」

「君って、保坂 光輝？」

自分の名前を当てられ、光輝は名前を呼ばれたときの少女のように目を丸くする。

「そ・・・そうだけど・・・？」

「やっぱりね」

一瞬、悲しげな表情をした少女。

不思議に思っていると、すぐに少女の表情は怒りへと変わっていく。見間違いなのだろうか？と光輝は思う。

「とりあえず、あたしの名前は桐島 真由。君の名前を知ってるのは、

あたしは君を探していたから。さて、君はなんであたしの名前を知っているの？」

真由はテキパキと話す。

自分が質問する前に、質問の答えを述べる・・・ある意味、聞く手間が省けたなと光輝は思っていた。

質問に答える様子がなかったためか、真由はますます顔を歪ませる。

「えつと・・・あ、君、有名人だから？」

「残念。あたしは、今日、初めてこの町にきたの。有名なものにも、この町じゃ無名よ！」

「・・・実は、会ったことがある！」

「あたし、1度会った人の名前って絶対に覚えてる自信ある。君は、絶対に会ってない！」

ことごとく否定する真由。

これは、下手な言い訳は通用しない・・・と光輝が思ったとき、

「・・・じゃあ、いいよ。この質問に答えて・・・君は、氷狩 英

知か  
如月 絵里奈を知ってる？」

氷狩？如月？

聞いたことのない名前に、光輝は首を傾げるだけだった。

「本当に、知らない？」

「あ・・・ああ、知らない」  
きつぱりと、光輝は言う。

嘘をついてもこの子には見透かされる、というか、本当に知らない。  
「・・・別に、あたしは君を探してたし・・・氷狩も如月も知らないなら安心ね」

真由はそつとため息をつきながらいうと、光輝へ視線を戻す。

「改めて自己紹介をするわ。あたしは、桐島 真由。さきほど言ったとおり、君を探してたの。」

“ノア”の人と共に・・・ね  
「のあ？」

光輝は首をかしげた。

真由は「そっか」ときよとんとしていう。

「・・・知らない・・・か」

「はい、全く」

「・・・ノアは」

「君を守るための駒だけ」

声は真由のものではない。

光輝はあたりを見回した。真由はまっすぐ、向く。

町の明かりがかすかに灯るなか、うつすらと暗い屋上に1人の金髪の青年。

「なあ、桐島 真由ちゃん？」

「黙ってくんない？“墮天の頭脳”君？」

鋭い目で真由は金髪の青年をにらみつける。

金髪の青年は、真由の方をみてクスクスと笑い続ける。

「おっと、光輝には自己紹介してないな？俺の名前は蘭堂らんどう 九紀くきつてんだ」

「・・・悪い、俺・・・光輝じゃない」

きよとんとした表情で光輝は言う。

真由と九紀は啞然とし、首をかしげた。

「人違いだ、それじゃ」

「な・・・嘘つくなよ!!」

「俺の名前は日坂 光だ。俺は、お前らとは関係ない」

「・・・バレバレなんだよ!!」

九紀は手にナイフを持つ。

光輝は直感で悟る。「かかかわると危険だ」

「だから、俺は保坂 光輝ではない。人違いだ」

「・・・本当？」

九紀は真由に問い尋ねる。

真由は「あたしに聞く？」という表情で九紀を見つめる。

「・・・頭脳が、きいてあきれる」

という真由の言葉に、九紀ははっとする。

「やっぱ、嘘ついたな!!」

「・・・バレたか・・・」

(くだらないな)

2人の会話に、真由はため息をつく。

真由があきれているとき、九紀は殺気をただ寄せていた。

「っ?!」

「大丈夫 俺の目的は、保坂 光輝の確認だから。“今日”は、殺らないぜ?」

そういつて、九紀はナイフを懐へとしまう。

「じゃあな、真由ちゃん・・・そして・・・っと、まだ知らないんだっけ?じゃあ、光輝だ。」

じゃあな、光輝」

そういうと、九紀は柵をのりこえて下へと降りていく。

「な・・・っ!!」

慌てて光輝は柵の下を見下ろした。

しかし、金髪の青年・・・九紀の姿はない。

「・・・な・・・!!」

「死んでないわ。墮天ですもの」

「だ・・・墮天?」

光輝は真由の方へ振り返る。

「アダム率いる・・・ね」

「・・・くー、本当に何もしなかったみたいね・・・」

クリーム色の髪の毛を軽く2つに結った少女は携帯を閉じて言う。  
近くにいた、水色の髪の毛の少女は小さくため息をつく。

「頭脳だ。戦いは苦手ですよ」

「くー・・・強いよ？」

クリーム色の髪の毛の少女は水色の髪の毛の少女の方を見て言う。

水色の髪の毛の少女は「わかつているが」という。

「まあまあ、2人とも言い合わない」

2人の少女の間に、黒髪の青年がはいる。

2人の少女より背は高く、腰には2丁の銃のはいったベルトホルスターをつけていた。

「・・・藤崎・・・か」

水色の髪の毛の少女は軽く舌打ちしている。

藤崎と呼ばれた藤崎ふじさき 篤綺あつきは、苦笑する。

「詞詠も沙羅も、少しは落ち着けよ？」

水色の髪の毛の少女、琴倭ことわ 詞詠しえいとクリーム色の髪の毛の少女、霜月しもつき 沙羅さらは  
篤綺の方を見つめる。

「別に？あたし、しーちゃんとラブラブだも〜ん！」

「沙羅。その・・・しーちゃんって」

「何？しーちゃん？」

何をいっても無駄だ・・・と詞詠は思う。  
その会話に、篤綺は微笑しながら眺める。

「何笑ってるの？あつき・・・」

「べつにつに〜？それより・・・沙羅、英が呼んでたぜ？」

「えー君が?!」

沙羅は顔をぱあつと明るくさせた。

「お仕事だつてよ？急いでこいだつて」

「りょーかい」

沙羅は笑顔のまま、鼻歌をうたいながら走っていく。

《ボタンツ》とドアが閉まり、沙羅がいったのを確認すると、篤綺は椅子に座る。

「さてさて・・・いつまで、続くんかね〜」

「何いってるの？これからでしょ？」

詞詠は篤綺に向かって言う。

篤綺はタバコに火をつけ、「そうだな」といってタバコを吸う。

「やつと、見つけたんだもんな」

「ええ。そう・・・これから・・・」

そういって、詞詠は目を細める。

これからが始まりなんだ。

私は負けない。

定められた運命なんか・・・絶対に・・・

「・・・そうそう・・・」

詞詠は篤綺に視線をやる。

「そのタバコ・・・やめた方がいいんじゃない？」

「んで？」

「キスがまずくなるって有名」

そう詞詠がいうと、篤綺はすぐにタバコを灰皿へ戻す。

「へえ、以外だな〜詞詠がそういうのに関心があるなんて」

「勝手に言つてれば？てか、詞詠って呼ばないでよ・・・ウザイ」

「いいじゃん。な、しーちゃん？」

面白がって篤綺がいうと、詞詠は袖からさつとナイフを取り出してナイフの

刃を篤綺へと向ける。

「・・・」

「いい反応 さつすが、俺の見込んだ女だぜ」

そういうながら、篤綺は詞詠に銃口を向ける。

いつのまに抜いたんだ・・・と詞詠は思いつつ、ナイフを懐へとしま  
う。

「ここで争っても、英知君のためにはならない」

「英の・・・ね。ま、気詰めんなよ？ “墮天の剣”さんよ？」

「その言葉、そのまんま返してあげるわ・・・ “墮天の翼”」

冷たく、鋭く詞詠は言い放った。

《トントント》

「えー君、入ってもOKですか??」

「いいよ。おいで」

中から声がすると、沙羅はドアを開けて中へと入る。

中には銀髪で緑色の瞳をした青年らしい男が座っていた。

「沙羅、君に頼みたいことがあってね・・・」

「なーに？えー君のためなら、あたし・・・なんでもするよ？」

そいうと、沙羅は男の後ろへ回り、男の首に腕をまわして抱きしめるよにする。

男は沙羅の頭を軽く撫でる。

「九紀と共に、偵察にいつてほしいんだ。そして、場合によっては九紀を守って欲しい。」

ね？ “墮天の盾”ならできるだろう??」

「うん、えー君のためならがんばる」

そういつて、沙羅は男を力強く1度、抱きしめると部屋を出て行った。

「じゃあね、英知」

沙羅はドアを《パタンツ》と閉める。

氷狩 英知は、クスクスと笑みを浮かべる。

「いよいよだね・・・君の存在が確信したからね・・・安心しな？必ず、安楽の死を与えてあげるよ？」

君が昔したように、僕も君の存在価値を否定して、壊してあげるよ？」

そう英知はいい、月が隠れ、明けようとする暁の空を窓から見る。

「・・・遅いな・・・」

九紀は携帯を閉じる。

時刻は明け方の5時半をまわったところ。

「くー、お待たせ」

沙羅はにこにこしながら、九紀の側へと駆け寄る。

九紀は深くため息をつく。

「遅すぎ」

「ごめんねー？」

「・・・いいけどさ。早くいこうぜ？狙いが逃げないうちにな」

「了解」

九紀と沙羅は明け方の町の中へと消えていく。

暁の空には、眠っていた墮天とともに起き上がるかのように太陽が  
浮かび上がる。

### 3ピース 一瞬の隙をめぐって

「真由」「九紀」2人の人間と出会った翌日、光輝は朝早くおきると顔を洗い、簡単に食事を済ませると、自分の部屋に戻ってベッドに腰をかけた。

「・・・」  
手が震える。

光輝は、ため息をつきながら自分の手を見つめる。  
昨日の少女・・・“真由”とは、一体・・・？

【数時間前 九紀が去っていった後】

「あー・・・もう、こんな時間じゃん？」

真由はふと、腕時計を見て呟く。頭をくしゃくしゃになで、ぐちぐち独り言をつぶやいた。

光輝は首をかしげながら、真由を見つめた。

「どうかしたのか？」

「帰る」

「は？」

光輝は首をかしげる。いきなりの帰る発言。別に、光輝にとめる権利などないのだが、光輝には、真由から聞きたいことが山ほどあった。

しかし、当の真由はきりつと光輝を睨んで言う。

「か・え・るっ！！！！」

そういって、真由は帰ってしまった。色々聞きたかったんだけどな・

・・真由のこと、  
そして・・九紀という青年のこと・・いま悩んでも、しかたのないことだろう・・と光輝は思ったとき、

《ピンポーンッ》

玄関のチャイムが鳴り響く。

出る気分じゃない・・・と思いつつも、光輝は「はい」といってドアをあけた。

《ガチャッ》

ドアをあけるなり、光輝はボールのように目を丸くする。それは、目の前の可愛らしい少女のせいだ。

少女は首筋に垂れる茶髪が綺麗な少女だった。背は割りと低め。多分、160はないだろう。

こんな少女が何しにきたんだ？ふと、光輝はいま流行のキャッチセールのことが頭の中に浮かんだ。

「・・あ、噂のキャッチセール？俺は、英語教材も羽毛布団も買わないぜ？」

「あんだ、アホっ」  
いきなり、少女は光輝に向かっての言葉。初対面の男に対しての一

声、「アホ」

普通なら、かなり酷い。初対面の人に「アホ」というなんて、光輝の頭の中には、インプットされていないから余計失礼。

「・・・？」

「15の奴が、キャッチセールで働くか？少しは、頭働かせ」

確かに、言われてみればそうだが・・・と光輝は納得する。だが、なぜ初対面の子にこんな言葉を言われなくてはいけないのだろうか？

「え〜と・・・」

「あたしの名前は、眞田<sup>さなだ</sup> 灰<sup>かい</sup>。あんたの名前は知ってるから、言わなくても良いよ」

質問される前に答えられた。以前にも、誰かにこんなことをされた。誰だっただろうか……？

「てかさ……」

「ある人に頼まれて、あんたを迎えに来た。感謝しな」

尋ねる前に答えられてしまった。妙な敗北感を光輝は味わう。とい  
うか、この子は読心術でも使えるのだろうか？聞く前に、聞きたい  
ことを

答えてしまう……こんな感じの子、会った事が……光輝が考え  
ているとき、1人の少女の顔が頭をよぎる。

「桐島 真由！！」

ここまで来るまでの10分間、本当に辛かった。灰という少女は、  
話のいきさつによると真由に拾われて育ったらしい。

親の背中を見て子供は育つ？とにかく、灰との会話は重い。こちら  
が話そうとすると、灰はその質問に答える。

くだらないことだと、灰の長い長い毒舌と呼ぶような話が続く。可  
愛らしい顔つきだが、性格まで可愛くはないようだ。（非常に残念  
だ）

そして、連れてこられたのが目の前にたつマンション。光輝のすん  
でいるマンションより、ずっと高級感を漂わせる。

「真由姉がいるから……とりあえず、来て」

（俺・・襲われる……？）

妙なことを考えながら、おそろおそろ、光輝は灰の後を追う。

昼盛りの空のした、繁華街にいたある2人は目標の場所へ向かうた  
めに歩いていた。

「くー・・・お腹空いた〜・・・」

2人のうちの1人、沙羅はおなかをおさえながら、上目遣いで九紀に訴えかける。そんな沙羅を、九紀は冷たい眼差しで見つめる。

「黙れ。俺、いま金欠なんだよ」

「男のくせに〜?」

「関係ねえだろ」

ため息をついてもう1人の人物、九紀は言う。実はいうと、九紀は沙羅が苦手である。沙羅のハイテンションが、九紀には合わないらしい・・・

「というか、いつ会えるの?」

「誰に」

「墮天の風」

沙羅の言葉に、九紀は思い出したように笑みを浮かべる。

「ああ、そんな奴・・・いたな」

「いたなつて・・・しゅー坊を忘れちゃ駄目!」

「忘れてなんかないつて・・・てか、朱衣のこと、しゅー坊つて呼ぶのやめろよ。それつて、聞き方間違えると“しよーぼ”つて聞こえるつて本人いつ」

「しゅー坊は、あたしに逆らえないもん」

笑顔で沙羅はいう。この笑顔には、逆らえない。しゅー坊“は”じやなくて、しゅー坊“も”だ。沙羅に逆らえる奴なんて、英知ぐらいしかない。正直言つて、九紀自身も“くー”という呼び名はやめてほしいと思つている。犬を連想させるからだ。

「でも・・・意外」

「何が?」

九紀は沙羅に視線をやる。

「くーが、金欠なの」

「どーいう意味?」

「墮天の頭脳なのに、金銭管理ができないだもん」

沙羅の言葉に、がくりつと九紀は肩を落とす。(ちなみに、九紀が

金欠だといったのは、沙羅に自分のお金を無駄に使われたくないために嘘をついたもの。実のところ、九紀は某有名資産家の息子のため、金欠とは縁がない)

「あのな、確かに、俺は頭脳だけ？だけだな。それで、金銭管理ができるとか、まして計算の天才とかそういうのじゃ、ねえんだぞ？」

「ん？そういうもののなの・・・？」

首をかしげ沙羅は言う。駄目だ・・・と九紀は悟る。こいつは、根本的なところが、理解していない。

「・・・沙羅」

九紀は顔をゆがませながら、沙羅を見つめる。

すると突然、沙羅は歩む足をとめた。沙羅に続き、九紀も隣で足をとめた。

「・・・くー・・・静かにしたほうが良いよ？お客さんに・・・失礼だよ？」

笑みを浮かべながら沙羅は言う。さっと、九紀は前を見る。前には、1人の少女と1人の少年。九紀は、顔をしかめると少年と少女の前に立った。

「どうも、こんちわっ！」

「・・・」

「アハハ・・・な、に、初対面の奴らにそんな殺気ふりまいてるのかな？」

そういい、九紀は少年の頬の横に手を振りかざす。手は少年の頬の真横にあり、その手にはナイフが握られていた。

九紀には、この2人が“何”であるかがわかる。わかるからこそ、それに対しての反応をみせたのだ。

「・・・こんな街中で、よく物騒なものを出せますね」

「警告。いま、俺らは別件があるんだ。素直にここ、通してくれるなら何もしいぜ？ただ、どうしても通してくれないなら・・・ちよい、痛い目、あつてもらおうか？」

九紀の脅し言葉に、少年・・・早太は顔色かえず、率直に答える。

「貴方たちのその別件に、関わる・・・といったら、どうします？」

「・・・そーいうことか・・・そういうことなら、遠慮はなしってもん  
だ」

そーいうなり、九紀は早太の横の手をあげると同時に早太の体を勢いよく蹴り飛ばした。とつさのことに早太は反応できず、壁に当てられた。

「早太君っ」

少年の側にいた少女・・・姫優理はすぐさま、早太のもとへ駆け寄った。

九紀の隣にいた沙羅は、九紀の腕をグイッと引つ張った。

「くーっ！いきなりやるなんて聞いてな」

「おい、さつさとおきたらどうだ？」

喧嘩口調で九紀は言う。その声は、相当苛立っている様子だった。

九紀に蹴られた早太は、姫優理が駆け寄る前にすぐさま立ち上がると口の中の血をぺっと吐き出した。蹴られたことにより、唇が切れたのだ。

「これでも、部活で鍛えられてるんで・・・甘くみられちゃ、困りますね」

「そうかい、んなら・・・ちいと黙らしてみますかっ」

右手に銃を構えながらいった九紀の目は、本気そのものだった。

一方、某マンションの一室にて・・・

「・・・」

「・・・」

「何よ」

真由は腰に手を当てながら、光輝を見下すように見つめる。光輝は

灰に（半強制的）連れ込まれていま、桐嶋真由の住むマンションの一室にいる。話を聞くと、桐嶋真由は、どうやら光輝と同一年のようだ。同じ年なのに、このマンション？正直言って、このマンションは

セレブが住むようなマンションに似ている。ヒルズ族といっても疑われないぞ、こりゃ。

部屋にあげられると、すぐさま座らせられてお茶を出された。何気に、ティーカップはブランド物。こいつ、17のくせにしてセレブなのか？！・・・とツツコミたいが、あの性格から考えると後が怖いのでやめておく。

「人の顔、じつと見てんじゃないよ」

ああ、その言葉さえなければかわいいものの。口は悪いが、桐嶋真由は美人の分類にはいるだろう。俺の好みのハードルを楽々と越えている。（性格を除き）

灰はジュースを買ってくるといって、出て行ったために2人きり。いいのか悪いのか、正直わからない。

しばらく沈黙が続くと、真由が光輝の前のソファに腰をかけた。

「・・・先に謝っておく・・・無理やりつれてきて、ごめんなさい」

「はい？」

光輝はきよとんとした。突然の謝罪。

「正直に話したところで、素直についてきてくれるなんて思ってたなかったから」

「そうそう、それ。なんで、俺がこんなところに」

「こんなところ？」

何か不満でも？と聞いたげに真由は光輝を睨みつける。高そうなマンションと「こんなところ？」といったのがまずかったのだろうか・・・。光輝は軽く咳払いをすると、言葉を続ける。

「なんで、俺がこんなところに連れてこられなきゃいけないんだ？理由を説明しろよ」

「・・・実のところ、あたしも理由わかんないの」

そっけなく言われた真由の言葉。真由の言葉に光輝は啞然する。啞然する以外、何をしていいかわからなかったからだ。

「い・意味わかんねえよ?!じゃあ、俺はいつた」

「・・・約束の時間は過ぎてるんだけど・・・どこにいるのかしら」  
真由がボソツと呟いたときだった。

《バンツツツ》

扉が（蹴り飛ばされたように）開く音が聞こえる。あの、灰という女の子なのだろうか?しかし光輝の予想は、はずれた。

2人のいる部屋にきたのは、ショートカットの茶髪に派手な服をきた女だった。しかも、ブーツをはいたまま。土足・・・?

派手な女は、片手になにやら大きなばんをもっている。そして、派手な女は光輝の顔をまじまじと見つめる。

「あら?真由、いつのまに男の子らしくなっちゃったわけ?凛々しくなったわね」

「・・・へ?」

「・・・瑞穂、あたしはこつち」  
ため息をつきながら真由は言う。

瑞穂と呼ばれた女は、「え?」といいながら後ろを向く。そこには、困った表情をした真由の姿があった。

「・・・あれ?」

そして、この女はようやく自分の間違いに気づいた・・・。

「あーら、ごめんなさい?今日、風が強くてコンタクトつけてなかったのよ」

笑いながら派手な女、工藤 瑞穂くじょう みずほはいう。あまりにも変わったキララに光輝は「はあ・・・」としか言葉が

でなかった。真由は頭をかかえながら、瑞穂に向かって怒鳴り散らす。

「コンタクトをしないときは、眼鏡かけてくださいっていったですよ?!」

「眼鏡・・・あ、眼鏡があつたか」

恥ずかしそうに瑞穂は頭をかいた。深いため息をつく、真由は疲れた表情で光輝を見る。

「この人は、工藤 瑞穂。あたしより3つ上の20歳。一応、20歳ってことで表面的に保護者をやってもらってるの」

「一応？表面的？」

光輝は首をかしげた。

「あまりにもだらしなくて20歳とは思えないっ！責任感ないから保護者って思えないっ!!」

真由の怒鳴り散らす声が響いた。この、瑞穂って人には悪いかもしれないが、真由の意見に光輝は素直に同意していた。

見た目、性格、どう考えても責任感があるように見えないし、派手なだけで、見た目は少し幼く見える。光輝も、はじめは真由の妹か、後輩だと思っていた。こんなのが保護者なんて、信じたくても信じられない。

さらに、

「保護者ってのは、どっちかというとなんかねえだよ」

そう付け足したのは、光輝の後ろにいた灰だった。いつのまにいたんだろう・・・と光輝は思うが、口にはださないことにした。

「ほ・・・保護者・・・なんですか？」

とりあえず、1番話を通じるかもしれない人に光輝は尋ねる。光輝の言葉に、瑞穂はにこつと笑みを浮かべる。

「そうなのv“これ”に巻き込んだのも、元はといえばあたしだしね」

「・・・」

「君は、“これ”について聞きに来たのよね？真由からは、どれぐらい聞いているのかしら？」

「え・・・あ・・・」

光輝はふと、真由のほうを向く。真由はぎろつと睨むと、すぐさまそっぽを向いた。責任放棄？

「な・・・何も・・・」

「真由」

「なんで私が説明しないといけないの？そもそも、私は」

「真由っ！！」

さきほどまで冗談のように笑っていた瑞穂の表情が一変し、キツイ口調で真由にしっかりとつけるように言葉を放つ。

瑞穂の言葉に、真由は言葉を詰まらせた。唇をかみ締めると、瑞穂から顔をそむけた。

そんな真由を見かね、瑞穂が自分の財布からお札（しかも、福沢諭吉）を真由へと差し出した。

「・・・真由、灰と一緒に çık かけてきて頂戴」

「はあ？」

「芋ようかんが食べたくなつたの。よろしくね？」

「・・・」

瑞穂の笑顔に真由は負け、灰の腕をつかんで外へ出て行った。

《バンツツツツ》

乱暴に閉められた扉の音がむなしく響いた。瑞穂は息をゆっくりはくと、光輝のほうに顔を向ける。

「ごめんなさい。灰が勝手に連れてきてしまって・・・その上、真由の態度も・・・」

「いえ、ただ・・・俺に納得できるように説明してください」

「ええ、そうね」

瑞穂は一息おくと、ついにその口を開いた。

人ごみをさけ、繁華街にいた4人は近くの路地にいた。すでに乱闘ははじまっていた。

九紀は、ポケットから弾薬をとり、すばやく銃にいれ、早太に銃口を向けて引き金をひく。しかし、早太は銃弾を軽やかに避けていく。銃に対応すべく、早太も銃を使いたところだったが、九紀たちが使っているのは、エアガンの改造銃や模造銃。引き金をひいてもたいた

音がでないために、このような路地でも平気で使っている。その上、威力は抜群とくる。いくら路地だといっても、隣は繁華街。実銃など使えば、下手すれば一発で人にバレてしまう。バレた上に、他人を巻き込むわけにはいかない。歯をかみ締める思いで、早太はナイフを取り

出した。できるだけ間合いをつめ、早太自身により有利な状況にもちこもうとした。

一方、沙羅と姫優理のほうも争っている。姫優理は戦いが好ましくないのか、控えめな攻撃が多かった。対して、沙羅は積極的な攻撃が多い。エアガンはもちろん、ナイフなどの多彩な武器をうまく扱っていた。正直いって、沙羅と姫優理の戦闘経験はかなりの差があるだろう。それを補うため、姫優理は必死に頭を働かせる。

（真正面からいっても、この人には勝てない。私たちの目的は、“時間稼ぎ”あと、30分・・・！）

姫優理は短期戦のつもりで、はじめからとばした。沙羅の攻撃を紙一重で避ける。一瞬、沙羅は九紀のほうへと目を向けるとときがある。

“一瞬の隙”

姫優理の勝利への鍵だ。一瞬でもいい、自分から目を離してほしい。そんな姫優理の思いを知ってか、早太は笑みを浮かべる。九紀は確かに強い。頭も働く。しかし、“あの人”ほどではない。九紀の銃の弾が

きたるとき、早太は体ごと九紀へ体当たりをした。

「んなつ?!」

九紀と早太の両人は、地面へと強く転がり込んだ。そんな九紀をみて、沙羅の目が九紀へと向く。

「くーっ!!!」

《ピ》  
《》

まさに“一瞬の間”。

早太は目を丸くする。何が起きたのか、検討がつかないからだ。ただ、目の前に映る光景に驚くだけだった。

姫優理の作戦は、早太にもわかっていて。姫優理の基本戦法は、相手の“一瞬の間”を狙うこと。しかし、それは姫優理だけではない。それは、目の前の光景が説明している。

姫優理だけではない、このときを九紀も待っていたのだ。早太に体当たりされたのは、あくまで作戦の内。九紀が狙っていたのは、自分

危機の状況へ落ちるとき、“一瞬の間”を見せる沙羅を攻撃し、勝利を確信した姫優理の“一瞬の間”だった。姫優理が手のひらより少し

大きめのエアガンの改造銃を沙羅に向かって撃つ。その瞬間に、九紀は服の裏に隠してあった実銃をとりだした。もちろん、エアガンの改造

銃より実銃のほうが、弾丸のスピードがある。姫優理と同時に撃てば、わずかな差で九紀の実銃が勝つだろう。しかし、実銃の引き金

をひく

と、大きな音がする。実際、早太や姫優理はもちろん、九紀や沙羅が実銃を使わなかったのは、実銃を使うことによって、人に気づかれる

可能性があるからだ。わずかな可能性がある限り、実銃を使うのはリスクを伴う。

そんな状況の中、1枚上手なのは九紀だったのだ。九紀は腰にさげてあったブザーの紐を勢いよく引き抜いた。ブザーはすさまじい音を出して鳴り響く。その音がでると同時に、九紀は姫優理へ向かって銃の引き金を引く。銃弾は、姫優理の右肩にあたり、貫通していった。

ブザーなど、いまの時代、小学生ならたいていもっている。すぐに音を消せば、いたずらか誤って鳴らしたものだと思うだろう。ただ実銃を

撃つより、リスクは多少なりと低い。肩を撃ちぬかれた姫優理は、もっていた銃を地面へと落とした。それでも、引き金をひいたのは、九紀

とほぼ同時。弾丸は、沙羅へと向かって飛ぶが、沙羅の腕をかすめる程度にしか及ばなかった。

「っ……!」

「姫優理っ!」

「それ、それがあんたの弱点」

九紀はそう呟くと、自分の側にいた早太を蹴り飛ばした。足は顔にはいり、頭は壁へとうちつけられる。さきほどとは違い、モロに受けたため、ダメージは大きい。

「仲間とかいつてるから、隙が生まれるんだ。そんな感情、捨てちまったほうが身のためだぜ」

そう、感情なんていらぬ

感情があるから、人は表情を表す

感情があるから、人は恋をする

感情があるから、人は傷つく

感情があるから、人は弱くなる

自分を阻む感情なんて

必要ない

### 3ピース 一瞬の隙をめぐる(後書き)

この物語初の戦闘シーン。

戦闘シーン、書くの好きですがうまくかけません。

まだまだですね・・・

はじめのほうは何回か、このような戦闘シーンがあると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4350a/>

---

存在価値～神が愛したモノ～

2010年10月28日06時38分発行